

今年度のヨルダン本邦研修の深い学びが進んだ一場面

福井大学総合教職開発本部 国際教職開発部 ヨルダン本邦研修担当
福井大学連合教職大学院 教授
清川 亨

「そんなの無理。時間かけて百回話したって伝わらないよ」。昨年度のヨルダン本邦研修で「省察することの意味を話していただけませんか」と柳澤元研究科長に依頼した時に間髪入れず返ってきた言葉である。結局のところ、「30分ね」ということで受けていただいたのだが、同時に、「研修中、毎日のように『今、省察が進んでいるね』と研修員に意識させることだよ」とのアドバイスをいただいた。

受託事業「ヨルダン国学習環境改善を通じた初等教育退学抑止プロジェクト」の一員として、私は現地でパイロット校の校長先生や教育省のスタッフの研修や支援を担当している。その関係で、教育省の局長やスーパーバイザー（人事管理面も行う視学官）を研修員とした本邦研修を本学で受け入れていただいている。

2回目となる今回の本邦研修は令和5年10月30日（月）から11月10日（金）までの期間で行われた。もちろん、省察が進んでいると研修員に意識させることを日々貫こうと考え、研修中毎日それを意識したが、一方でプログラムを組むにあたり学校訪問では低学年の算数の授業見学と授業研究会を体験してもらおうと考えていた。低学年算数としたのはヨルダンでは現地の授業の現状を踏まえ、低学年の教員を対象に構造的板書法やノートテイキングなどに

ついて、アラビア語で行われていても我々でも分かりやすい算数や理科を具体例として研修を行っているからである。

今回訪問した小学校は、訪問順に福井市社北小学校、本学附属義務教育学校、福井市木田小学校で、それぞれの校長先生との事前打ち合わせで2年生の算数は九九の時期だと知った。私がヨルダンで九九の授業を見た経験から、「では可能なら2年生算数で」とお願いしたこともあり、結果的に3校ともが2年生の九九の授業参観となった。私は違う学年、教科、内容を参観したいとの声が研修員から出ることは容易に想像できたが、あえてそのままにしておいた。

社北小学校では、5つのチョコが入った箱が3箱あり、図を用いながら、教師からの1つ分の数が何になるのかの助言を受けながら考えた式を児童が互い説明する中で、1つ分の数が後に書いてあっても、かけ算はいつも「1つ分の数」×「いくつ分」で計算することを学ぶ授業展開であった。

附属義務教育学校では、「また九九なの？」の声と

内容

巻頭言	(1)
インターンシップ/週間カンファレンス報告	(3)
ミドルリーダー/マネジメントコースだより	(7)
月間カンファレンス/ラウンドテーブルだより	(16)
事務連絡	(29)

表情があったが、私は研修員の様子はどうなるかを楽しみにしながら授業参観に向かった。授業は配られた「5×〇 マスターシート」に従い、児童がそれぞれに思いついたものを絵で表し、それを5つごとにまとめた図にして、掛け算の式とそれを足し算で表しながらシートを埋めていく、という授業展開であった。

木田小学校では案の定「ええ！また九九！？」「違うのを見たい！！」と中には驚きの声を上げ、理解できないと苛立つような表情さえ見せる研修員もいた。授業は普段どおりでとお願いし、展開も3校ともにお任せにしていたので一抹の不安はあったが、まあ何とかなるだろう、ヨルダン研修員の授業参観中の反応を見ながら授業研究会の持ち方を考えようと思い、授業参観に向かった。授業のめあては「かけ算のもんだいをつくって はっぴょうしよう」で、児童は①掛け算の式をかく、②式にあった場面を絵で表す、③問題を書く、の流れで問題を作り、ペアで問題を出し合い、その後ペアを代えて問題を出し合うという授業展開であった。授業最初はうんざり顔だった研修員は、徐々に授業に引き込まれ、授業後の研究会会場に向かう研修員は興奮したように互いに何かを語っていた。

授業研究会では、「キヨが3回九九の授業を見せた理由が分かった」「ヨルダンでは九九は教科書を教

えるどの授業も同じような展開なのに、日本ではそれぞれに違うやり方で、児童が主体的に取り組み、かけ算の理解を深めるようにしている」「どうするところなのか」などの発言をしながら、各自がヨルダンの教育の今後のあり方や取組みについて思いを深めていると感じた。

もちろんこの場面に至るには、昨年言われたとおり、「今、省察が進んだね」「皆さんは毎日省察と実践のスパイラルループを回しているね」と言い続けたことと、間がそれぞれ数日空いた授業参観で、3人の先生がともに児童が主語の素晴らしい授業を展開したことにあると感じている。また、省察を進め、学びが深まるためには、メタ認知の場面を何度もつくることと、立ち止まって考える時間をつくることが大事なのだと何度も感じた今回の本邦研修であった。

もう少し詳しい報告はまた別の機会でさせていただくとして、改めてここにヨルダン本邦研修に関わってくださった方々、我々が研修に当たることでご迷惑をおかけした方々に感謝を申し上げ、駆け足の振り返りを閉じたいと思います。皆さまありがとうございました。



インターンシップ・週間カンファレンス報告

「長期インターンシップ」と「週間カンファレンス」を振り返って

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井県立高志高等学校

村橋 達也

私は今、福井県立高志高等学校の協力の元、長期インターンシップを行なっている。この学校の特徴として、次の2点を挙げる。

第1に、県立学校で唯一の併設型中高一貫教育校である。平成27年度に、県立高志中学校が併設されたことで、高志中学校から進学した生徒と他の中学校から入学した生徒が、学習、部活動、学校行事等で切磋琢磨しながら高校生活を過ごしている中、私はインターンシップ生として、こうした生徒らの様子を見とる機会がある。このことは、中等教育に携わる人間、つまり、中学校ならびに高等学校の教員免許状取得を目指すひとりの教師として、大きなメリットと言える。有難い話、私は高志高等学校に加えて、高志中学校のご理解とご協力もあり、中学校での授業の様子や学校行事も、自由に参観させていただけることで得られた学びや気づきも非常に多い。

第2に、いわゆる「大学進学校」である。例えば、令和5年度の場合、3年生においては4月29日、30日の第1回県模試から始まり、12月9日、10日の大学入学共通テストプレテストまで、13回の模擬試験が行なわれる予定である。大学入試を経験したことがない私にとって、その回数多さに衝撃を受けた（高等学校として、この回数が多いのか少ないのかは図りかねるが…）。また、数学の授業に限って言えば、単元あたりの時間として、そのスピード感に圧倒された。このスピード感は、決して授業が適当だというわけではなく、生徒の習熟度を適切に見極めた教師集団によって完璧に調整された、端的な講義と豊富な演習によるものだと考える。要点を適切に押さえた簡潔な講義においては、生徒自らが自分な

りに理解することが求められる。その中で、自然と生徒自身が思考する瞬間が生まれることは、授業にスピード感を持たせるために不可欠な要素だと感じる。また、多種多様な演習によって、生徒が問題慣れすることは、思考のバリエーションと発想の俊敏性を高める点において、一定の効果をもたらしていると思われる。この気づきは、高志高等学校だからこそ得られたものだと振り返る。

こうした「個」として獲得した学びを同輩ら「集団」に共有するとともに、その学びを深め広げる場が、「週間カンファレンス」だと認識している。週間カンファレンスの在り方については、編成や運営、あるいは、大学院科目としての単位等、色々と思うところがある。これは、それぞれが違った角度や視点、期間や環境を以て獲得する、多種多様で千変万化な学びによるものであることは間違いない。「個」の学びは、それぞれの人間性や生い立ち、価値観によって「思惑」へと変化する。この「思惑」がぶつけ合う、ぶつかり合わせることで「集団」を形成しようとするのが「週間カンファレンス」の在り方である以上、仕方がないだろう（もしくは、「思惑」の衝突が「週間カンファレンス」の在り方を決定づけた要因かもしれないが…）。だが、少なくとも「週間カンファレンス」が存在している以上、有効活用すべきであることは間違いない。私は「個」を「集団」と結びつけるために、「私にはどんなことができるか」「私はどうあればいいか」模索し続けてきた。これは、これからも変わらないだろう。いつもボーッとしている私だが、あくびでんじはで起点作成でもしようかな。

試行錯誤中

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属特別支援学校

村上 瑠菜

4月からインターンシップが始まり、私は附属特別支援学校の中学部3組に配属された。学部時代には、小学部で教育実習や個別学習に取り組んだことはあったが、中学部は初めてだった。私は初日から足を怪我したため、松葉杖で学校へ行っていた。どのように子どもたちと係わっていかうか不安な中、インターンシップが始まった。

行動制限のある中だったが、私は子どもと話をしたり、自分ができる範囲を子どもたちに伝えたりしていた。子どもたちは私ができる遊びを提案してくれたり、ドアをさりげなく開けてくれたりと私とどのように接したらいいのか、考えて関わる機会になっていたのではないかと振り返って感じる。

先生方の授業に入りながら、授業づくりについて学んでいる。1つ1つの授業は単独になっておらず、他の授業にもつながりがあり、子どもたちが見通しを持って活動に取り組んでいる姿を目の当たりにしている。それは先生方の教材研究やカリキュラムマネジメントがあつてのことだと学んだ。1つの授業であつたとしても、様々な要素を含んでおり、別の活動に見えてもどのように他の活動がつながっていくのか先生方が見通していた。私も先生方の授業づくりに参加していきながら、学びを深めていきたい。

インターンシップでは、中学部の1人の生徒Sさんと個別学習を行っている。4月から6月はクラスの子みんなの個別学習を行っていたが、その中でSさんのことばや数の世界はどんなものだろうかと気になり、取り組むことになった。これまで行って感じたことは、教材づくりの難しさや自分で答えを確認できることの大切である。まず、教材を作る前に、Sさ

んが好きなものを探っていくこととした。折り紙で作ったものを見せてみたものの、Sさんにとっては身近なものや特に好きなものではなかったことから、怖い、嫌だというように拒否された。休憩時間に探してみると、アリエルやプリキュアが好きなことが分かったため、これらのキャラクターを使って教材を作っていくことにした。

前期に何度か実践したみたもののSさんにとって難しい課題になってしまったり、私の想定していることが少なかつたりしたこと、私は目の前で起きていることに対してうろたえ、Sさんにとっても、どうなったらいいのか分からない状態となった。また、合っているのか間違っているのかを私が判断しているところがあつた。教える—教えられるという関係になってしまっていた。さらにキャラクターに気を取られすぎて、数の学習という視点で見ると、よくわからないことが多かつた。課題設定やどうなるといいのか、また教材を毎回作り変えていたことが、Sさんの混乱をまねき、取り組むことにハードルが生じてしまったと考える。

後期に入ってから何度か実践をしている。ようやく手続きが定まったことや好きなキャラクターのシールがあるかどうかで正解なのかをSさんが自分で確認できるようになった。そして、キャラクターを前面に出さないようにしたことで、目の前の課題に取り組みやすかつたのではないかと考える。

まだSさんの実態はつかみきれていない状態ではあるが、少しずつ、実践を積み重ねていきながら、Sさんの世界を知っていきたい。

問題に直面し続ける実践

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井県立丸岡高等学校 杉本 彩綺

私は、小さな頃から理科に触れてきた。その中でも動植物がとても好きで、そのため、理科の中でも生物を専門とし、生物の楽しさを伝えられるような授業ができるようになりたいと思い、4月に期待しながら入学した。前期の間は多くの授業の見学をさせていただき、先生方の技術を見て学び、自分が作っていく授業の考えを膨らませていた。そして現在、高校で専門の授業を作ることの難しさに直面する日々を過ごしている。

後期からは2つの授業を実践させていただいている。一つ目は、生物の実験を行う授業である。この授業は4月にメンターの先生から提案を受けた授業であった。主に担当として見ている3年生のクラスに生物を身近に感じられるような実験の授業をするというものであった。私は工学部出身であったこともあり、授業実践は片手で数えられるほどしか経験したことがない。もちろん実験の授業は1度もしたことがなかった。授業の計画段階でも、どんな授業ができるかの楽しみより、どうすればいいのか分からない漠然とした不安が大きく、なかなか計画を立てることができなかった。特に、「実験と理論をつなげること」については考えさせられた。メンターの先生から実験の導入で生物の内容とつなげた理論を説明して欲しいと言われ、私なりに理論と実験をつなげて授業を行った。実験の内容が工学部時代に研究室で行っていた「菌」にしていたため、私の中で実験と理論はつながりがあった。しかし、理論と実験をつなげて説明しても生徒たちの中で知識とつながり、理解に変わったように感じることはできなかった。授業の流れを知り、内容を作った私が話す理論は、素晴らしいの伝わらない芸術作品のようなもので、どれだけ私が試行錯誤して一生懸命作り上げそれを説明したとしても、生徒自身が考えようとしないうちは「よく分からない」と思うだけである。理論は経験や結果から生徒自身で見いだすべきものであると身をもって感じるようになった。また、今回行った生物の実験

は結果が出るまでに時間がかかり、かつ生物を取り扱うため結果が思ったものと大きく違うものとなり、予想していた授業の方針と生徒の興味関心が大きくずれることも起きた。生物の実験は理科の他の科目と比べより身近に感じやすいが、実験を行うことはとても難しいと感じた。

もう一つの実践は、生物基礎の4回の授業である。血管、腎臓、肝臓など体内環境を維持する役割についての範囲で授業を行っている。この授業は、夏休み中に提案され急遽計画した授業であった。そのため、「知識詰め込みの授業はしたくないな。範囲は決まっているし、知識を詰め込むのではなく自分がやりたかった実生活に活かせる生徒主体の活動的な授業をしよう。」と安易に計画をしてしまった。はじめは、ある題材を挙げ、それについてタブレットを使った調べ学習を行った。授業を見た様子では生徒が興味を持って調べてくれることが多く、学びにつながっているように思えてしまった。そのため、次の授業も違う題材で同様に授業を行うことにした。こちらも生徒の学びになっているように思えた。しかし、この授業後に授業で用いたワークシートを回収して確認した時に、学んでいるにしては違和感のあるものが多かった。そして多くの生徒が、調べ学習の答えを自分で理解し「考え直して書く」のではなく、見つけたそれらしい答えを「写している」だけであることに気づいた。この授業で初めて、見た目だけの活動のある授業と、本当の活動の中の学びは別であり、「活動あって、学びなしの授業」をしてしまっていたと思い知らされることとなった。

また、どちらの授業でも「ワークシートによる評価」を取り入れているのだが、これが難題である。実験の授業では実験方法が論理的か、考察が深く考えられているかをまるばつで評価するのだが、実際に評価をしてみるとこの基準がなんとも言えず曖昧であった。「できているかと言われれば微妙にできていない

気がするけど、ばつかと言われればそれはちがうし…」という生徒が多く出てきてしまった。今回はメンターの先生との打ち合わせでこの評価方法でとなっているためどうにか評価しているが、評価基準を明確に説明することには自信がない。生物基礎の授業では、現在はどこをどう評価するのか右往左往している状況である。ワークシートは結果として見やすいため主体性などを評価しやすいと言う話を聞いたことがあったが、実際に評価してみて評価のできる

ワークシートを作る必要性和その難しさに気づかされ、自分の考えの浅さに現在苦しめられている。

実践が始まり多くの問題に直面する一方で、その答えがはっきり見つかっていない状況である。金曜カンファレンスや合同カンファレンス、研究集会などで多くの考えを取り入れ、その中で今の自分にできる最善の答えを考え続けていきたい。

1 年半を経て

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

多田 朋生

大学院1年の時に丸岡南中学校でインターンシップを1年間行い、大学院2年の時に附属義務教育学校でインターンシップを行って半年が経った。大学院に入学してから1年半インターンシップで学校に行ったということになる。

大学院1年時では、インターンシップを通して自分自身の何が成長しているのか分からなかったということや良く覚えている。子ども達は4月～3月にかけて、行動や言動が変わってきたことは良く分かったのだが、自分自身はこのインターンシップを通して何を学んで、それがどのように自分自身に活かされているのか、全くと言っていいほど分からずインターンシップに何のために行っているのだろうと常に感じていた。そしてそのまま1年間が終わっていった。

大学院2年次になって、丸岡南中学校から福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程へとインターンシップ先が変わった。附属義務教育学校で非常勤講師兼インターンシップとして働くことになったというのが主な理由である。附属義務教育学校での生活が始まって、ふとした時に去年の丸岡南中学校でのインターンシップでの経験を思い出すようになった。特に理科の授業をしている時や、授業を考えてい

る時に自らの経験を思い出すということが多かった。何故このように去年のことを思い出すことができたのかなと考えると、それだけインターンシップで授業を見たり、生徒のことを見たりしていたのだろうという結論に至った。

自分が何を学んでいたのかというのは、すぐには分からないものなのかもしれないと今は考えるようになった。私はすぐに結果を求めるタイプの人間である。成果が出なければ、意味がなかったのかもしれないあと、短期間で物事を考えがちである。正直な所、今もその考え方を捨てきれていない所はあると自分自身で自覚している。インターンシップを長期的に行く意味について、初めは生徒の成長を、1年間を通して見るためなのだろうと漠然と考えていたが、自分自身がいろいろな経験を学生の内から行い、大学院を卒業して学校現場に出たときに大学院での経験を基にして頑張っていくために必要なのだろうと考えるようになった。

インターンシップを通していろいろなことを学んでいたということに気が付いたのは自分としても良かったことだと思う。ただ、一人で学んでいたわけではなく、インターンシップ先の学校の生徒や先生方、大学の同級生、教授など様々な人達の助けがあった

からこそだということは忘れないようにしていきたいと思う。またこれからも多くの人と協力しながら多くのことを学んでいくことを楽しみにしていきたい。

インターンシップを通して1年半が経ち、こうして文章に書いてみると、1年半で自分自身が成長してきたのかなと感じることができる。大学院卒業まであと半年、少しでもいろんな経験をして、来年度活かすことができるように自分自身を成長させていきたい。



ミドルリーダー/マネジメントコースだより

10 月カンファレンスを終えて

ミドルリーダー養成コース1年/福井県立若狭高等学校 澤田 更紗

教職大学院に入学し、早くも半年以上が経った。月間カンファレンスや、ラウンドテーブル、夏季集中講座などを通して、さまざまな立場の方々とお会いし、その取り組みについてお聞きしたり、自分の取り組みについて話したりする機会となっている。毎回、さまざまな取り組みをお聞きして感心するだけでなく、自分と異なる立場からの視点を知ることができ、これまで以上に日々の取り組みについて考えることができる。10月の月間カンファレンスは私にとって久しぶりの対面で参加するカンファレンスであり、実際にいろいろなお話をお聞きできるのを楽しみにしながら会場へ向かった。

このカンファレンスでは、オリエンテーリングとして鈴木先生から、藤島高校のすずかけ AGORA の取り組みについての実践発表をお聞きした。学校内でコミュニティを作っていく取り組みであり、小さなコミュニティがどんどん大きくなっていき、成熟していく様子をお聞きすることができた。

午前中のグループセッションでは、鈴木先生の発表を基に対話を行った。このグループには、留学生の先生や、現在インターンを行っている先生、ファシリテーションの富永先生と William 先生という、立場が異なる先生方がいらっしゃるのがとても楽しかつ

た。発表の話から、同僚の先生といかに関わっていくかということについて話したが、それぞれの立場から見えているものが異なることがわかった。中でも印象的だったのが、グアテマラでは training teacher と呼ばれるインターンのような先生がおり、その人達に対して「How did you feel?」と彼らの「気持ち」や「感情」を聞くということである。実践を行ったときに、自分の考えについて聞かれることや、相手に対しても「なんでそれをしようと思ったか」という理由聞くことはあっても、お互いの気持ちを聞く場面はあまりない。相手を尊重するためには、相手の考えだけでなく、相手が何を感じているかについても聞きながら、一緒に考えていくことで良い教師同士のコミュニティを作ることができるのではないかという学びになった。私自身、今年度から同じ学年の教科を担当する先生方が、新採用や講師の先生が多く、そういった先生方とどのように協働するかということに難しさも感じていた。同じコミュニティにいと、見えなくなってしまうものがある中で、新たにそのコミュニティに参加した人から新しい視点を学ぶという気持ちを持ち続けることの大切さ、新たにコミュニティに参加した人たちがいかに働きやすい環境を作るかは、他者を尊重することであるということに改めて実感した。

午後のグループセッションでは、ストレータマスターの先生方と、自分のこれまでの実践についてお話をした。評価についての話では、観点別評価をどのように考えるか、私たちが行っている評価が本当に生徒にとって意味のあるものになっているかどうかについて対話を行った。観点別評価については、昨年度から考えていることもあり、どのように評価することで生徒の学びを支えられるかについて改めて考えることができた。日々の業務に追われ、評価についてもじっくりと考える時間がなかなか取れないため、これまでの評価について考え直しができた。また、もう一人の先生からは、理科の授業での取り組みについてお聞きした。生徒が面白いと思う授業について日々考えながら実践をされているところが印象的だった。

毎回、月間カンファレンスに参加して考えることに、自分が行っていることを伝えることの難しさということがある。これまでの取り組みにどのような意味があるのか、自分が何を考えてその取り組みを行ってきたのかについて、振り返りながら話すことで、見えてくることもあれば、もっとこう伝えればよかったと思うこともたくさんある。また、こうして月間カンファレンスに参加することで、実践だけでなく理論も必要であるということを実感する。

今後もカンファレンスで得られる新たな視点を活かしながら、自分自身の取り組みの意義をより明確にしていきたい。教職大学院での残りの時間も、自分自身が何を考え、感じているかを日々問いながら実践を行い、それを振り返り、価値づけていくことで、理論と実践の往還を実現していきたい。

組織・コミュニティにおける自己を捉える

ミドルリーダー養成コース1年/奈良女子大学附属幼稚園 宍戸 佳央理

定期的実施される教職大学院のカンファレンスにおいて、学ぶ仲間と集い、様々な立場やキャリアをこえて対話し、省察する機会をいただけることは、慌ただしく過ごす日々から少し立ち止まり、自らの実践、そして自分自身を見つめ直す貴重な時間になっている。

また大学院で様々な文献や書籍、先輩方の長期実践報告を読ませていただくことで、現在の実践や自身の立ち位置を異なる視点から、異なる言葉で捉え直し、前へ進む力をいただいている。

学びの過程を振り返ると、これまでは、実践を通して、他者と対話し、互いに問いをもちながら、意味を見出していくことに面白さを感じていた。最近、それらに加え、組織やコミュニティについて考える機会が増えていることに気が付く。組織における自分の役割は何かを考え、コミュニティ形成のあり方を模索する姿勢は、自らの実践とその周辺を捉えることが多かったこれまでから、変容しているのかもしれない。

しかし、視野が広がったような感覚はなく、明確な答えが見えないまま、目の前の実践に一生懸命になっている気もしている。

どのような組織であっても必ず「ともに」があり、関係性の中で自己を発揮しながら物事を進めていく。教師と子どもの学びは相似形と言われるが、実践を重ねる中で、学級、学校、社会など、組織のあり方においても重なっているのではないかと考えるようになった。子どもと大人、教師と保護者として切り離されるものではなく、相手が誰であっても、互いにどうありたいのかを大切にしながら関わる姿勢は大きく変わらない。しかし実践の場で、子ども同士の「ともに」が語られている一方で、組織としての「ともに」は見えにくい。そういった中で、教職大学院の対話をはじめ、園での実践研究が、組織における自分のあり方を考える機会となっている。

今年度は、実習生と実践を創ることを意識した教育実習のデザインや、預かり保育の先生方との対話

の場の保障、園行事の全体像を捉え、組織として進めることの模索など、様々な立場の方と、仲間として何ができるのかを思考している。また夏に実施した協働探究型研修では、「共創」をテーマに校種や職種を問わない様々な立場の方と遊び、対話することを通して「ともに」を見つめることができた。一つ一つの実践は、個々に点となっているように見えて、それぞれが有機的に循環し、作用しながら進んでいるものである。

単純に一緒に作業をするわけではなく、明確なゴールに向かって、役割分担をしながら進むものでもなく、互いを尊重し、差異を共存させながら、相手との関係性の中で新たな世界を創造していくこと、そ

れらを支えているのが、対話と省察であることは変わらない。私たちは何を大切に実践していこうとしているのか、見出される意味を探究していくことができれば、組織としての創造性もより高まっていくのではないかと考えている。現在の実践が、どのように重なり合い、循環していくのか、そしてそれらをどのように私自身が捉えられるのが楽しみである。

これからも私とあなた、一対一のものでもなく、わたしたちが組織として「ともに」実践していくことを意識し、それぞれの立場をこえ、互いに作用しながら、新たな意味を創造されていく意味や価値を探究していきたい。

生徒主体のコミュニティ作り

ミドルリーダー養成コース1年/カリタス女子中学高等学校

高橋 美幡

教職大学院で学び始めて半年が経ったが、まだ半年かというくらい濃密な学びを得たと実感している。毎月のカンファレンスではいつも「もう学ぶことはない」と思うくらいの満足感を得られているが、実際は毎回新たな気づきがあるので驚きだ。そもそも学びにゴールはないので満足している場合ではないのだが。

さて、皆さんは教職大学院に所属していると「何かしらのコミュニティを作らなければならない」というプレッシャーを感じることはないだろうか。私は入学当初、「何をすればいいのか」「何ができるのか」「いや、何もできない」「だって先生たち忙しいし！」などと消極的な気持ちでいた。カンファレンス等でいろいろな先生方の実践をうかがう度に「私にマネができるだろうか、いや、できない」などと落ち込んでいた。しかし月間カンファレンス等でそのような悩みを吐露しまくったところ、「新しく作る必要はない」「今いるコミュニティでアクションを起こせばよい」とアドバイスをいただき、肩の荷が下りた。

そのようなわけで少し光が差した私のコミュニティ作りであるが、今あるコミュニティへの働きかけのほか、実はもう一つ実践してみたいことがある。それは図書館で定期的に放課後サロンを開くことだ。

（自己紹介号を見ていない方、申し遅れましたが私は図書館専従の司書教諭です！）なるべく生徒主体でサロンを開催し、時には教員にも参加してもらえようような集まりになればよいと目論んでいる。なぜそのようなサロンを開きたいと考えるようになったのか、その理由となるきっかけは三つある。

一つ目に、「社会問題について語りたい」「何かアクションを起こしたい」という高校1年生2名が現れ、教員に相談して定期的に図書館で会合を開くようになったことがあげられる。図書館は場所を貸しているだけなのだが、その生徒たちの様子を見て、社会問題に限らず趣味や推し活のことなど、いろいろ語りたい生徒がほかにもいるのではないかなと思うようになったのだ。（因みに本校の図書館は完全なる静寂が保たれる場所になく、放課後はすぐ隣のフォワイエでコーラス部やオーケストラ部が練習を行うこ

ともある。そのため、試験前や試験当日以外は多少のお喋りは許容範囲としている。)

二つ目に、教員から「読書会をやりたい」と言われたことがあげられる。意外と授業以外でも語る場所を求めている教員がいるのかもしれない。そうした教員がいつでも気軽に参加できるような場所を作りたいと考えるようになった。

三つ目に、夏期集中講座で自分の実践を振り返った際、「生徒主体の活動が無い」と気づいたことがあげられる。生徒にいろいろ経験させたいと思い、これまでビブリオバトル・和装本作り体験・他校との交流会・出版社見学などのイベントを開いてきたが、全て私が準備していた。事前準備から生徒に企画・運営してもらうように働きかけることで、生徒がただ参加者として楽しむだけでなく、一から作り上げるやりがいや苦労なども経験できるような機会を作る必要性を感じた。

この放課後サロンを実現させる第一歩として、図書委員会・司書コースの生徒に役割を担ってもらうことにした。図書委員会では月に一回全員で取り組む活動の他に、週に一回有志を募って司書の仕事を覚える「司書コース」がある。その活動の一環でイベ

ント企画を立ててもらうことにしたのである。現在12月の開催に向けて動いているので、その様子はまたの機会にご報告できればと思う。

入学当初はこのようなコミュニティ作りよりも授業支援のあり方・関わり方について答えを見つけないと思っていた。しかし、実はこうした課外活動の延長上に授業支援も繋がっているのではないかと考えるようになった。

夏期集中講座で「コミュニティ育成の七原則」を学び、この考え方がいろいろな場面で応用できるのではないかと考えた。例えば探究の授業で本を使ってもらう(Webサイトだけでなく多様な資料を使ってもらう)にはどうすればよいか。こちらが一方的に言っても効果はなく、生徒自らが必要としなければ意味はない。そのために、まずは本が「使える」ということを実感してもらう必要がある。今までは授業で一斉にと考えていたが、サロンや夏期講習などで地道に普及していく道もあり、むしろその方が効果的なのではないかと考えるようになった。

入学当初の気負った気持ちを一旦リセットして、身近なことから着実に進めていこうと思う。

理論と実践の往還

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/福井県立武生高等学校 島田 直子

「暑くなって寒くなったら受験だよ」と、勤務校で生徒によく言っています。つい先日も「ほら、もう寒くなるよ。(時間がない中で)自分のやるべきことは何か、考えて行動してね。」と話していました。でも、今年は私にとっても、寒くなったらやるべき時、長期実践報告を書き上げる時がやって来ます。生徒達に伝えている言葉が私に還ってきて、生徒と同様に焦り始めています。

昨年は県のマネジメント研修を受講し、事前履修として夏期集中と冬期集中、そしてラウンドテーブルに参加しました。長期実践報告や理論書を読んだ

り、対話し互いに語り合うことで自分自身を省察したりと、とても楽しい日々でしたが、「理論と実践の往還」は私自身の中にじっくりきていませんでした。実際、夏期集中でコミュニティ・オブ・プラクティスを読み、互いに語り合いましたが、昨年はそこから1回もコミュニティ・オブ・プラクティスを開くことはありませんでした。理論書が不必要だったのではなく、必要だと理解できなかったのです。今振り返ると、私はきっと何らかの理論に基づいて実践を行っていたのですが、その理論に気づくことなく、ただ実践を振り返り、他者の実践から次の実践を組み立て

実行する、その繰り返しだったのだと思います。毎年何かが足りないと感じながら、しかしどうすることもできず、15年以上経ってしまいました。今年、教職大学院に入学し、毎月のカンファレンスに参加することで、「理論と実践の往還」にはっとさせられました。私に足りなかったのは、まさにそれだったと、やっと気づいたからです。

学校改革マネジメントコースに在籍していますが、私が行っている実践はまず授業です。授業の中に対話を組み入れ、教室に実践コミュニティを作るのです。そうすることで、自走する集団を育てることが目的です。授業では、毎時間ペアワークやグループワーク、発表や意見の言い合いなどを行っています。知の楽しさを学び、コーディネーターの教師がいなくても、誰かがコーディネーターになって、いつでもどこでも実践コミュニティを作れる、そのような生徒たちになってほしいからです。クラスには固定されたコアメンバーやアウトサイダーがいます。以前の私ならアウトサイダーの存在に悩むことも多く、正しい解を求めて実践書を読んでいました。ただ、コミュニティ・オブ・プラクティスに還ると、どのレベルの参加者もフルメンバーのような気持ちになれるように活動を設計することが大切だとありました。そこで問いを変えたり図で表現したりするような取り組みを入れると、アウトサイダーでも時に周辺グループになることが分かりました。実践したら理論に、理論から実践に、往還させることで少しずつ生徒たちのコミュニティが変わっている気がします。

次に、化学科教員の中で実践コミュニティをつくる取り組みです。化学科の若手教員は、武生高校にあるPT (Project Team) のコアメンバーでもあり、様々な実践を行っています。授業公開も積極的です。この

若手教員を軸に、互いの実践を話し合いながら、情報交換を行っています。評価方法についても同様です。最初はこの活動に効果があるのか不安もありましたが、コミュニティ・オブ・プラクティスの「価値に焦点を当てる」に立ち還り、続けています。化学科では、社会に生きる化学を伝えるための実践も行っています。授業で学んだ内容をもとに商品開発を行っている企業を招聘し、学んだ内容とつなげて出前授業を行ってもらい取り組みです。出前授業後にアンケートを取ると、「社会とつながることが面白い」という質問は、授業前と比べて大きく伸びます。化学科での活動は、高校教育課が行っている「引き出す教育・楽しむ教育実践事業」を活用しています。

次に、支援です。武生高校には、Project Team (略して PT) という自主教員研修プロジェクトがあり、若手教員を中心に月1回程度、放課後の30～40分を利用して研修会を行っています。この自発的に集まるコミュニティを支援する取り組みを始めました。これも、コミュニティ・オブ・プラクティスや学習する組織に還り、行おうと決めたものです。例えば、職員会議を簡易にし、空いた時間でPTの研修会に関わるグループワークを、教員全員で行いました。付箋で考えを出し合い、話し合ったことをまとめて職員室に貼りだす予定です。

私が行っていることは「理論と実践の往還」であるのかは分かりません。しかし、少なくともこの教職大学院で学んだことは、確実に私の中に浸透しています。学校改革マネジメントコースでは、多くの先生方が学校改革に取り組み、実践を語り合い、理論に還る取り組みを行っていらっしゃいます。刺激を受けながら、多くのことを学び続けたいと思います。

教職大学院での学びがもたらしたもの

学校改革マネジメントコース1年/福井市岡保小学校 吉岡 高成

2年もあると思っていた福井大学連合教職大学院も、もうすでに残り半年となり、これまでに自分が何を得たのかを振り返ってみると、3つ思い当たることがあった。

まず、「知識」である。特に夏期集中講座で手にした本や資料は、教員として過ごしていく中ではなかなか手に取ることがないものばかりだった。昨年手に取った『コミュニティ・オブ・プラクティス』では、実践コミュニティについて知り、分散型コミュニティの在り方をこれまでの教員生活の中での取組に落とし込むことで、今現在行っている教員間や学校間でのコミュニティ作りのヒントとなっている。今までの実践と照らし合わせ、省察することで、今の取組に役立たせることができた。また、今年の夏に読んだ『学校を変える力』からは、変革に際しての困難や効果を読み取る中で、今現在の課題としてある、個別最適な学び、協働的な学びを実践していくに当たって、自分のビジョンとしてどのような学校になって欲しいか、どのような力を子どもに付けさせていきたいかという姿を頭に思い浮かべることができた。そして、『省察的実践者の教育』では、まず、自分自身がこの省察という言葉の意味をちゃんと理解していなかったことを知れた。大学院に入ってから、大学院の中で、グループセッションでの先生方との会話の中でよく出てくる言葉ではあったが、「振り返り」程度の意味でしか捉えてなかったことを痛感した。また、「ついてきなさい!」「協働実験」「鏡のホール」といった、自分が職場の中のコーチとしての役割を果たすのに有用な知識を得ることができた。私事ではあるが、自分の妻も職種は違うが、職場でのミドルリーダーとしての役割を果たさなければならない立場にあり、自分と同じく研修を重ねており、この大学院で出会うような用語や手法の書かれた本とにらめっこをしているのを目にしている。(※家庭内で互いに分からない言葉を説明し合う中で(※夫婦間

で)、この大学院で学ぶことは、単に学校内で通じる狭い範囲のことではないのだなとしみじみと思った。

次に自分が得たものは、「気付き」だと感じている。例えば、カンファレンスでのグループセッションでは、様々な立場や校種の方々からそれぞれの視点の考えと指摘をいただいた。特に幼児教育を専門とする院生の方からは、『学校を変える力』にもあったような、学びの根幹が幼児教育にあることに気付かされた。子ども一人一人の物事を理解したいという学びへの欲求を高めるような、学校にしなくてはという刺激になった。また、幼保小連携という言葉はあるが、幼児教育から渡されたバトンを自分は引き継いでいるのかと内省するきっかけにもなった。子どもたち一人一人を見取っていく姿勢は個別最適な学びに繋がる。見習うべき姿を教えてもらった。そして、中学校や高校の先生方からも、現状や課題を教えていただき、小学校から先の学びの姿やどのような力が必要になっていくのかという見通しをもつことができた。

最後に思い当たったものは「見方」である。カンファレンスを通して、今までは自分の勤める校種にしか目がいていなかったが、幼稚園の姿や中学校の姿、そして高校での姿を伺うことができ、先々をみての考え方ができるようになってきた。また、自分の受け持つ学級だけでなく、学年、学校、地域とよりよくしていきたい対象が広がっていったのを感じる。そして、自分一人で頑張るのではなく、みんなで子どもを育てるのだという原点に立ち返れたように感じている。

学校改革マネジメントコースでの学びは、管理職でない自分でも得るものが多い場所になっている。教職大学院での学びも残りわずか、得たことを無駄にしないためにも、そして、さらに深めていけるよう、今後もいろいろなことを学んでいきたいと思っている。

「生徒が主語の学校づくり」を目指して

学校改革マネジメントコース2年/品川区立荏原第一中学校

黒田 佳昌

今春、異動となり新たな学校での生活も半分を過ぎた。教職員との関係づくりや学校の「強み」と「弱み」を探り、具体的な方向性を示しながら生徒も大人も活力があり、安心、安全で温かい学校を目指している。

教職員は、互いに対話が自然と出て活気のある教師コミュニティであり、その対話こそがわれわれ教師にとって大切なことだと実感するとともに、本校にとって最大の強みであると考えている。教師同士が自然と対話する環境と意図的・計画的に対話を通した実践コミュニティの創出、そして互いを認め支え合える安心感のあるチームを目指したい。

一学期末に校内でカンファレンスを開催した。仲間の話をじっくりと傾聴することや自分を振り返りながら、考えを整理して他者に話をする事の大切さ、人に話を聞いてもらうことの心地よさを感じ、仲間のことをよく知ることができたり、互いが対話することの大切さを理解したりする機会となった。教師たちからの反応は全体的に好評であった。

今、学校として『生徒が主語の学校づくり』を目指している。急速に社会が変化していく中でこれからの子供たちは、自分（たち）の力で考えて、解決していく力が必要である。学校教育でそのような力をしっかりつけさせるために、講義型の教え込みに偏った授業をやめ、生徒一人一人が学習の見通しをもち、学んだことを友達と共有したり、意見を出して考えを深めたり、新たな考えや発想を見つけたり、学んだことを表現したりする学習に転換していかなければならない。また学級づくりや学年づくり、学校行事や生徒会活動など、教師がきめ細かく指示を出すのではなく、生徒が考え、協議し、計画して、実行し、振り返るという経験をさせ、自己肯定感や達成感をもたせることが大切だ。さらに本校の教育目標である「共生社会の実現に参画し、生き抜く生徒の育成」を

実現するためには、考えの違いを相手の立場に立って理解し尊重することが重要で、そのためには丁寧に対話や議論して対立を乗り越えて、合意形成を図ることができる集団（クラス、学年、学校）づくりを目指している。

令和5・6年度と東京都教育委員会の「体育健康教育推進校」研究指定を受けることとなった。研究主任から「この研究は保健体育科や養護教諭が取り組むというものではなく、学校全体で取り組んでいきましょう。」と力強い言葉をもらった。研究を進めていく中で、校内研修会の講師として、元広島県立高校の教師で現在は一般社団法人ボトムアップ・パーソンズ代表理事の畑喜美夫先生を招いて、生徒が自ら考えて行動できる、自主自立した組織づくりについての講演をいただいた。それは生徒（選手）が自ら気づき、自分たちで考え、話し合い、相互理解を深め、合意形成をしながら組織としての意思決定をして自主性や主体性を引き出していくという理論である。そのような中で教師は、基本的に「信じる」「任せる」

「認める」という生徒を見守り、気付かせるというのが基本となる。そのために教師は、「ミッション」と「ビジョン」のベクトルを明確にし、クラスや学年、学校、チームの方向性を生徒、教師が常に共有していく。目的は自主自立のできる人間力の育成である。この講演が終わったあと、職員室では、先生方が「信じる・任せる・認める」とつぶやいていたり、「信じて、任せるって時間がかかるんだよねあ・・・、でもこれが大切なんだよね・・・。」と言っていたりして盛り上がっていた。そんな会話を聞いていた主幹教諭が「今日の話は、校長が言っている生徒が主語の学校づくりなんだよ・・・」と声を掛けてくれた。そんな教師同士が感じたことや思っていることを互いに言い合える関係性があるから若手教員がいろいろなことに、失敗を恐れず意欲的に取り組んでいる。また若手

をミドルやベテランが温かく見守り、適切な支援をしている。

私にとって、このような組織や学校の方向性を目指している裏には、毎月の合同カンファレンスで教職大学院の先生方や院生の仲間と対話を通して学ん

だことが大きく影響している。この学びも残り5か月弱となるが、これからも先生方や多くの院生と対話を通して有意義な時間を創り、成長していきたいと思う。

学び続ける教師であるために

学校改革マネジメントコース2年/岐阜市立徹明さくら小学校

宮谷 郁江

教職大学院で学ぶ中で最も思いを強くしていることは、「学び続ける教師でありたい」ということです。世間で教師の働き方が問われ、仕事のスリム化や効率化、早く帰宅すること等が求められるようになりました。そのような中でいつの間にか、日々の雑多な業務に追われ、教師として最も大切である「子供の学びをどうするか」という議論や、自分たち自身の授業力を高める努力が後回しになっていたように思います。ここでたくさんの同僚と語り合い、自分を省察することを繰り返し行うことで、私は、教師が学び続けることの大切さを改めて感じました。そして、自分自身をアップデートさせたいという思いを強くしました。

昨年度立ち上げた「若手の会（クレリア会）」は、今年度「さくらホワイトの会」としてアップデートしています。今年度私が教務主任を任されたことを生かし、週初めの打合せや週報で、「さくらホワイトの会」の予定や様子を発信しました。そうすることで、会に参加しない人も、その週の会に参加できなかった人も、「さくらホワイトの会」でどんなことが行われているかを見たり聞いたりすることができるようにしました。

また、これまで若手職員の悩みを打ち明ける場であり、研究授業の前に一緒に授業を考える場であったものを、「ベテラン教員とつなぐ」という視点を加えて取り組むようになりました。教室を巡ってベテラン教員から学ぶ機会をつくったときには、「今日は教室を巡ると聞いて、掃除してみました。」と、待つ

ていてくれるベテラン教諭がいました。若手が教室を訪れると、掲示物や物の置き方など、丁寧に説明してくれました。そして、そこに込められた思いをたっぷりと語ってくれました。夏休みには、大学の協力を得て、徹明さくら小学校、草潤中学校の職員、岐阜市と羽島市教育委員会を交えてラウンドテーブルを開催しました。ラウンドテーブルの後には、「私、しゃべっていたら、今までの自分と今の自分を振り返っているうちに涙が出てきてしまった。」と自分の思いを伝えに来てくださるベテラン教諭がいました。こんなふうにして、「さくらホワイトの会」の取組にベテラン教員が呼応してくれる機会を今年につくっていくことができます。

若手教員の変化もありました。岐阜市の社会科部会の授業者を引き受けた、初任3年目のA教諭は、さくらホワイトの会での検討の他に、社会科専科の教諭のもとへ自らコンタクトを取り、指導してもらうために通う姿がありました。今年度特別支援学級の担任になったB教諭は、初めての特別支援学級に戸惑いながらも、非常に前向きに学級の児童の指導にあたったり、他の教諭から学ぼうとしたりしています。B教諭とは、新たに「実践記録を書く会」を開くようになりました。その会は3回行っているのですが、B教諭が行っている自立活動の実践を省察する場となっています。

昨年度クレリア会を立ち上げた時、「ベテラン教員を動かすことはできない。だから、若手だけでも、協働できる場をつくれませんか」と考えていました。「若

手は本当に学びたいと思っているのか。」と不安でした。それがいつのまにか、「ベテラン教諭も巻き込みたい。」と模索するようになりました。若手の前向きに学ぶ姿に、自分も負けていられないと刺激を受けるようになりました。2年前には考えてもみなかったことです。この2年間の実践を通して、私の思いもアップデートしていきました。このような一つの一步が、また次への一步を生み出すのだと気付きました。

た。それが学び続ける教師であるということなのだと思います。

今年度あと半年の「さくらホワイトの会」をどのように展開するか、来年度継続するためにはどうするか、新たな課題について模索しながら、残りの教職大学院での学びを進めていきたいと思っています。

初の公開保育に至るまで

学校改革マネジメントコース2年/まごころ認定こども園 高尾 和人

もう早くも11月になり、年末も少し意識し始める時期になってきた。坂井市内の保育所や幼稚園、こども園は、だいたい12月に次年度の新規入園者や転園者が決まる。そのため、私立の園で経営に携わる方や管理職の先生方は、12月末や1月くらいから、本格的に次年度のことをしっかりと考えだす方が多いのではないと思う。今年度のことをじっくり考えられる残り少ないタイミングといった意味では、私にとっても、この時期は、今年度のこれまでを振り返り、残りの見通しを立てる貴重な時期という位置づけになっている。

さて、つい先日の11/1、私の園では初めての公開保育を実施した。これは自園や私にとってとても大きいことだった。公開保育自体の振り返りはまだほとんどできていないが、そこに至るまでも様々なことがあった。そのことについて少し振り返ってみたい。

そもそも、公開保育は、私が教職大学院のことを知るきっかけだった。公開保育を実施する認定こども園に対しては、園の施設型給付費に加算（園の収入の上乗せ）がつく。園の経営的な都合で、一昨年、私はそれについて調べたり相談したりしていた。そのなかで、さくら認定こども園の伊藤康弘園長先生に教えていただき、教職大学院に関わる私立園の学びあいのコミュニティがあることを知った。その後、私自

身も教職大学で学ぶことになり、さくら認定こども園、福井校成幼稚園、和田こども園、森田さくらこども園の実施する公開保育に参加させていただく貴重な機会を得るなかで、私の園でも公開保育をしてみたいという思いを抱くようになった。

ただし、公開保育をやりたいが、それをトップダウンで、いいことだからうちでもやりましょうと職員に強制するようなやり方を私はしたくなかった。また、私のマネジメントのスタイル的にもそれは難しかった。そのため、昨年度より、自園の職員に他園の公開保育に参加してもらったり、公開保育を一旦やろうとなっても職員が今はできないと感じているようであれば計画を白紙に戻したりするなかで、徐々に計画を進めてきた。そして、先日、やっと1年半がかりで、今回の第一回目の公開保育にこぎつけることができた。

実施が決まってから公開保育を行うまでのなかでは、実に様々な職員間の対話があった。公開保育をするにあたり、私から職員たちへは、「特別なことはせずにありのままでよい」、「日々の活動のつながりを意識しながら当日の活動に至る過程やその後の展望について保育者の言葉で語ることができるようにしておく」、「続けることが大事なので無理はしない」といった私の基本的な考え方を伝えた。自園の中心となる職員たちは、それぞれに他園の公開保育に参

加し、それを持ち帰り意見を交わすなかで、イメージを膨らませながら自園の公開保育の準備を進めていくてくれた。また、それだけではなく、職員同士の話し合いのなかで、園の環境設定について、いろいろと見直す必要があると考え、できる範囲の見直しなどを自分たちで役割を振りながら進めていくてくれた。

例えば、園庭環境の見直しのなかでは、年中出しっぱなしだったキックボードや三輪車などをしまってみたら、砂遊びなどの別の遊びのなかで、子どもたちの遊び方にいろいろな広がりが出てきたといった変化があり、それを保育者たちが発見し、共有しあい、私にも伝えてくれるということがあった。また、2歳児のクラスでは、子どもたちが登園して身支度を終えた後からスムーズに遊べるよう、前日の保育が終わってから、人形遊びや粘土遊びのコーナーなどを翌日の子どもたちがすぐに見えるような形で準備し

ておくことが、保育者の一日の流れとして定着するようになった。

これらのことは、当たり前に行っている園にとっては何を今さらということかもしれない。しかし、私は、私の園の保育者たちが自分たちの対話と実践のなかで自らそれに気づき、主体的に取り組んだなかでそこにたどり着いたということにとっても価値を感じている。そして、そのように対話を通じて、保育者が、日々の保育教育を発展させていくということは、他者から教えられて身につくものではないとも感じている。果たして、それが今回の公開保育への取り組みを通じて自園に芽生え始めたのか、それはまだまだ分からないが、まずは、今回の公開保育の振り返りを行い、次につながる話をするなかで、職員間の対話をしっかりと深めていきたい。



月間カンファレンス報告

インターン生にできること

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井県立丸岡高等学校 **黒瀬 玲凱**

10月の月間カンファレンスでは、午前中に組織の在り方について語り合った。鈴木先生による藤島高校での実践を聞きながら私は自分がインターンに赴いている高校の教員集団を思い描いていた。高校は他の校種と異なり、職員室が業務によって分けられている。さらに、教科の専門性が高まり、教科の壁が大きく立ちはだかっている。鈴木先生のお話はそのあたりには言及されていなかったが、参加人数を見るに、その壁を超える何かが先生方の中にあるのではないだろうかと感じた。

インターン先の高校では、職員室の壁、教科の壁をひしひしと感じている。同じ島にいる先生方の中には話し合いが起こる場面も見られるが、教科の壁や業務の壁を越えて相談をしている場面を見かける機会は少ない。教科については教科会が開かれており、特に国語科などはよく話し合っていると聞いているが、理科については物理、化学、生物の教員が一人ずつしかおらず、教科会が開かれているのは成績会議や職員会議で必要な議題が発生した時のみである。組織やコミュニティとして活動しているというよりは、同じ組織の枠組みの中で一人一人が仕事をして

いるような気がする。もしかすると、私自身が 1 人で働いていると思っているからそう感じているだけかもしれない。

教師が、教師集団として活動するためには、教師集団としてはたらく必然性を問わなければならない。私が授業をしながら感じている教師のコミュニティの必要性は、「生徒に身に付けてほしい資質能力の認識の共有」である。極端な話をすれば、1 つの教科だけが「生徒が自分で考える力を身に付けてほしい」と思い、生徒が考えることをベースにした授業をしたとしても、他の教科が知識詰め込み型の授業をしているのは、生徒にそんな力が身につくことはないだろう。教科担任制だからこそ、教科間での「そのクラスの生徒たちにどういう人間になってほしい」という考えを共有していないと、どの先生の考えも達成され得ないし、理科の教科内でのすり合わせがなければ「理科的な見方・考え方」が根付くことはないのではないだろうか。

教師全体に教師集団としてはたらく必然性を感じてもらうためにはインターン生にできることは少ない。私なりの解を持っているとして、それは正解とは限らないし、解が 1 つとも限らない。インターン生の戯言で終わってしまうかもしれない。しかし、インターン生だから何もできないわけではない。インターン生だからこそ果たすべき組織に対する責務があるはずである。今私にできることは、より多くの先生方と話をし、それぞれの先生が何のために日々の授業をしているのか、生徒たちにどんなことを期待しているのかを聞いたり、自分なりの考えを話し、「話し合うことの大切さ」を感じてもらうことである。組織に縛られていない立場であるからこそ、潤滑油として動ける可能性がインターン生にはある。自分なりにできることを考え、行動をする人が 1 人でも増えることが、集団を変える第一歩になると思う。

これからの自分の在り方

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

桑原 里沙

10 月の月間のカンファレンスの初めは藤島高校の鈴木先生の「すずかけ AGORA」のお話を聞いた。ここ 2 年間で先生が実施したものの中には、classroom や Chromebook の ICT 活用講習を行う場や授業改善や各教科のつながりを考える場などがある。ICT 活用においては、授業はもちろん、業務においても活用することができる。授業改善においては、自分の授業を他の教員に見てもらい意見をもらうことも他の教員の授業を見て勉強することもできる。このような場があるのは、数年後教員になる私にとって勉強にもなり、コミュニケーションを取ることに繋がると思った。

鈴木先生のお話を踏まえ、グループ 1 では各学校の組織について話す時間であった。その中でも印象に残っているのは各教科の組織である。私の配属校

では週に 1 回各教科の教科会がある。私は社会科であるため、教科に特化した教員が複数いる。しかし、グループの中いる情報科の方の話を聞くと、勤務校では情報科を専門としている教員がおらず、他の理系教科の教員が情報科を担当していると話す。それを聞いたとき、同じ教科の教員が複数いて、その教科について深く考えることができるのが当たり前ではないと分かった。社会科のため、同じ教科の教員がいないことはないかもしれない。しかし、自分の教科のことだけを考えるのではなく、他の教科の教員とも話して授業改善をしていきたい。そのために配属校で他の教科を専門としている教員の授業も見るようにしたい。

午後のグループ2では授業実践と探究について話した。文理で探究科がある若狭高校では生徒一人ひとりの研究したいこと（例にはカビや空気についてなどがある）を中心としている。グループで探究していたとしても方向性が違くと個人探究に変化する。この探究の中には、個人で深める時間もあり、グループで深める時間もあるということになる。やりたいことが同じである生徒同士集まり探究を進めていくが、他のグループとの関わりがほとんどない。そのため、他のグループとの関わりをもって刺激になるような活動をする必要があるのではないかとグループ内で考えた。

ここでは若狭高校の探究を述べたが、探究の時間がある学校のみが探究について考えなければならないのか。私が小・中・高校生のころは探究の授業があったかと聞かれるとほとんどなかったと答える。公立学校且つ普通科ではあるが、探究ができないわけではない。国語科や社会科でも探究ができる。教員が考えた課題でただグループ活動をさせるのではなく、子どもたちの知りたいこと・調べたいことを課題に

する。しかし、各教科には学習指導要領があるため、身に付けさせたい資質・能力にあった探究をさせる必要がある。探究をさせるが学習指導要領に沿うようにと考えると今の私には難しいのかもしれない。これからのインターンや来年度の教育実習で、授業を行う教員としての探究の知識を身に付けていきたい。

今回、10月の月間カンファレンスについて述べてきた。それを今の私と照らし合わせるとどうだろうか。金カンでM1企画を近々行う。それに向けてM1で話し合っている。M1の組織として、まとまらないというのが現状である。考えだしたころから今まで、方向性・モチベーションの違いに触れることなく、淡々と進めてきた。M1の組織としてどう進めていこうかと最初に話し合うことができていれば今こうなることはなかったのかもしれない。今一度、組織としての動きを話し合っていくことが必要であると考え。私なりの役割を探し出し、行動することができるようになりたい。

変化を味わう ～半年間の私を振り返って～

授業研究・教職専門性開発コース1年/岐阜聖徳学園大学附属中学校

和藤 隼生

教職大学院に入学して半年が経過した。日々のインターンシップ先の生活に慣れるとともに、4月当初と比べ多くの変化が見られた。これは、子どもの様子を多角的に見てきたことによるものなのかもしれない。

まず、私立中学校へのイメージの変化である。私は公立学校出身であり、当初私は、私立中学校はテストの成績が優れている子が入学し、高校受験へ向けて勉強に励む個の集団であると考えていた。しかし、実際はそれだけではなかった。授業では、一問一答の穴埋め形式ではなく、思考する場面を必ず設定する。ま

た、枠にとらわれない探究的な学びも行う。特に、理科において1年に一度行うパッケージ学習と呼ばれる活動では、生徒一人一人が日常生活で感じる疑問やもっと知りたいと思うことについて教科の枠を超えて解決にあたる。例えば、「なぜ空が青いのか」「なぜ人は記憶できるのか」といった素朴な疑問から「食用コオロギには闇がある?」「気づいて豚の魅力!」など、自分自身が興味を持ったことについて突き詰める生徒など多岐である。

また、生徒同士のコミュニケーションも活発である。学習塾に加え、バレエやヴァイオリンなど多種多

様な習い事をしている生徒が多い。ゆえに、生徒一人一人が自分の強みを持ち、その良さを認め合える学校の雰囲気であるため、クラスの団結力にも驚かされる。

次に、私自身の授業への向き合い方が変化した。これまでのカンファレンスを通して、様々な人からあらゆる視点での授業の見方を学ばせて頂いた。中でも、授業者の先生と協働して授業を作り上げるという視点はこれまでの私にはなかった視点であり、この助言に伴い私の授業への参加の仕方が、参観者から T2、時には授業者へと変化した。

したがって、授業の前には学習指導要領を読み込み、この授業での狙いはなにか、どのような生徒になってほしいかなど具体的な支援策を想定しながら、授業に参加することができており、さらなる自分自身の学びとなり、成長へとつながっている。

メンターの先生が行う授業では、和藤先生への質問コーナーを設けて頂いている。そこでは、「気孔は普通葉の裏に多いと学んだが、葉の表に多い植物はあるのか?」「台風は低気圧に起因しているが、台風の日では晴れており、下降気流が発生している。ここには高気圧が存在しているのか?」など授業で学んだことから発展した自身の疑問について毎日、質問が飛び交う。この質問に答えることで、私自身の教科への専門性も高まっていると感じる。

最後に、生徒への見方の変化である。夏季集中講義ではコミュニティの存在の大切さについて学んだ。インターンシップ先の学校での先生たちとのコミュニケーションはもちろんのこと、生徒同士のコミュニティにも気を配っている。コミュニティ・オブ・プラクティス (E. ウェンガー著) では、学級はコアグループ、アクティブグループ、周辺グループに分類することができると記されている。私は、学校集団を一つのコミュニティと捉え、そこであるクラスを 3 グループに分類し、中でも周辺グループに着目することにした。特に気になったのが、周辺グループのメンバーはその子なりに適した学習法で学んでいるということである。当初、私は全員が授業で発言する場を設けたいと考えていたが、それが本当に善策であるのか考えさせられる良い機会となった。

このことから、私は生徒一人一人がそれぞれ個性をもち、その個性を生かすためにはどのような手立てをすればよいのかという視点に切り替わった。そこで、「〇〇しなさい。」という強制的な表現をやめた。

多くの経験から人は変化することができる。私も、この半年間様々な変化を遂げてきた。今後も経験をもとに知識や技術を蓄積し続け、私の変化は止まらない。

コミュニティの存在意義と私の目標

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井県立鯖江高等学校 富田 一葵

4 月より約半年の年月が過ぎて長期実践報告の推敲を始めていかなければならない時期になりました。1 年半の振り返りと現在の課題を同時にこなすという過去と未来の板挟みにあい、心身ともに疲弊していく中、夏の集中サイクル以来 2 ヶ月ぶりの合同カンファレンスが開かれました。

今回の 10 月の月間カンファレンスでは、「新たな同僚を支え、世代を超えて学び合う」というテーマのもと、藤島高等学校鈴木先生の話提供から始まりました。語り合いの場を重要視し、組織の中でのコミュニティの設計および展開について成長曲線をもとにした実践についてのお話がありました。設計段階での難しさやコミュニティ運営における理想とのズ

レなどの課題がある中で解決策を模索しながらコミュニティの存在意義に立ち戻りつつ立て直していくなど、今一度、私自身がコミュニティに所属している意味やコミュニティの基盤作りについて自分の思いや考えを見直す機会になりました。

私の今カンファレンスでの話の軸として教科「情報」に対する悩みを挙げさせていただきました。

昨年度よりも「情報」に対する関心や研究が進み、多くの講演会や参考書などと接する機会が増えつつあります。私も県内外の講演会や授業参観に参加しながら色々な実践に触れたり、日々、新たな考えや挑戦を学び、考察し、実践へと繋げたりしています。しかし、それには限界がきていると感じています。何故なら、高校に情報科の専任教員がいないからです。ほとんどの高校では他教科専任の先生方が兼任して授

業にあたっています。そのため、専任として授業を行っている私にとって、情報の授業に対しての校内での話し合いがしにくい状況(どんな授業実践に触れても、それを共有できる教員がいない。授業で挑戦しても、それを協議する場も人もいない状況)が続いています。コミュニティ作成のために夏の集中サイクルや月間カンファレンスでは、コミュニティ作成のために必要なことについて学んでいました。今カンファレンスで話していくうちにコミュニティ作成について学んでいく最中で、コミュニティを作成したうえでのビジョンが薄れてきているのではないのかという、コミュニティ作成の目的を見失っている自分に気づきました。今一度、私自身が何を目的に情報科のコミュニティを作ろうと思ったのかを振り返っていききたいと思います。

「探究」の追究

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

大畑 颯人

10月の合同カンファレンスでは、主に自分の“探究”観が少し変わった。高校時は理数科に所属し、課題研究を通して探究の面白さを知った自分は、学部での「探求ネットワーク活動」および教育実習を行っていきながら、自分も探究的な学びをコーディネートできる教師になりたいという思いが強くなっていった。この院での学びも中心にあったのは“探究”だったように思う。

今回、附属義務教育学校 河合先生の「探究迷子になっている」という話題から、探究とは何かという議論が行われた。学部時代から一貫して私の探究のイメージとして“あった”のは、「探究は研究に通じるもの」という考え方である。そのため、探究では、疑問から予想を立てて、検証方法を立案し、検証結果をまとめ、考察していく中で学びを見出していく必要があると考えていた。しかし、話をしていくうちに何故か自分の考えにじっくりこない自分がいることに

違和感を覚えた。今の探究のイメージが、それとは少し異なっていることを示す違和感だったように思う。

しかし、グループメンバーからの「子ども達が面白くて没頭していたらもう探究って言えるのではないか？」という意見から、自分がなぜ違和感を覚えたのか、なんとなく見えてきたように思う。昨年度1年間附属義務教育学校前期課程で講師をしている中で、探究的な授業をしようと心掛けてはいるものの、いつしか「自分の実践している授業(見ている授業)は本当に探究なのか？」と感じるようになっていた。そして、今実践しようとしている自分の授業の計画に対しても「本当に探究か？」と自問自答を繰り返し、探究ではないかもしれないと苦しんでいる。しかしそれは、この1年半探究を追究してきたからこそ「探究とは何か？」という問いに対する答えが膨大になってしまい、膨大になったそれらの要素を少しでも満たしていなければ探究とは言えないという、0か

100 かでしか捉えきれていなかったためだと気づけた。「子ども達の意見に寄り添えていれば質の高い探究になる」のように、質の高い探究から質の低い探究とグラデーション的に要素が存在するというように考えることで、自分の実践も少し見え方が変わった。この先の実践ではグラデーション的に存在する要素を分析して、探究に対する引き出しを増やしていけたらと思っている。

今、ストレートマスターの金曜カンファレンスでは、今年度開始前から展望していたカンファレンスの集大成である“グループ探究”がスタートしようとしている。それらを運営する M2 会議では、グループ探究をどのように始めようかという会議が展開されてきた。特にグループ探究をどのように始めていくのかというデザインの段階では、決めるべきことが、それ以前の考え方に相違があり決まらず座礁した。その会議の翌日にあった合同カンファレンスでは、次の一步をどのように踏み出すか悩んでいたが、カンファレンスで相談する中で、今の会議の現状と次どうするかが少し見えたように思う。その中でも印象的だったのが、「細かく突き詰めていけばいくほど、

見えなくなるものもあるのではないか」という意見である。今まで全員のプランに対して、折衷案をいかに考えるか、そのために細分化して 1 つ 1 つを理解することに徹していたが、細分化しすぎて、どちらを選ばいいか見えなくなっていっていた。プラン全体を大きな構造として捉えて比較する視点も必要なことに気付くことができた。

そして個人的な成長として、次の一步を踏み出すのは自分ではないことを自覚できた。今までの自分だったらこの状況のときに、自分で何とかしないと、と動き出していたように思う。しかし、今までのそれは勝手な使命感に駆られてのことだった。今回の一件では自分 1 人で何とかするのではなく、周りを頼ろうと思えた。ほとんどの M2 がこの Newsletter で金曜カンファレンスを語るほど、熱い想いを持った M2 に囲まれている。他の先生方からも評価をいただく恵まれたコミュニティで、コミュニティの形を探究していきたい。そして、今まで“実は”苦手としていた協働の価値を見つける探究もしていきたいと思う。

いよいよ長期実践報告書を書きすすめる

ミドルリーダー養成コース 2 年/足立区立東綾瀬中学校 矢成 清美

教員となり 4 年間という短い期間ではあるが、出会ってきた個性豊かな生徒たちとの、飽きることのないストーリーを長期実践報告書で語りたいと思う。ここでは 4 月から着任した特別支援学級のある生徒をご紹介します。中学 2 年の男子だ。後期から先輩教員より担当を引き継いだ、入学時より配慮事項が多く苦慮していた。問題行動も多く、提出物が出さないし、口が達者で、言い訳上手である。話していると定型発達の子とみまごう。当然クラスメイトをからかったり、下に見たり、その類まれなる運動神経を鼻にかけていて「少しやっかいな生徒」というのが初見であった。まずは少し距離を置いて、その言動をつぶさに観察した。先輩教員から彼について

「たとえルールを破っても、頭ごなしに怒ってはいけない」「保護者が仕事で多忙のため、急用以外は電話しない」「クラスメイトと喧嘩になる前に別室へ移動させる」「朝食を食べていない場合は、保健室から支給されているドリンクを飲ませる」「授業中寝ていても起こさない」など詳細な引継ぎがあった。この生徒に限ったことではないが、生徒個々の事情に合わせ、私たちは常に配慮している。それにしても、先輩教員たちがこぞって彼を手厚く扱っているのはなぜだろう。そこには理由があった。彼には大人を笑わせてくれる高い会話力がある。座学の授業では積極的に挙手をし発言する。給食では素早く 30 人分の汁物の配膳をすることができる。そして体育の時間は彼

の独壇場だ。どうしてこの生徒が支援学級在籍なのだろうと思わせる。しかしひとたび作文を書かせたり九九を暗唱させたりすると、その落差に愕然とする。作文はほとんどひらがなを用い、九九は表を見ながらでないと簡単な計算もままならない。学習に必要な記憶する力、処理する力は低いと言語理解の力が高いという状況から、保護者の障がい受容も出来かねるため「愛の手帳」は取得できていない。ただ小学校から学習困難を抱え支援学級に在籍していたため、中学校も支援学級と判断された生徒である。中学入学時は出来ないことがあまりにも多く、泣いてばかりいたそうだ。先輩教員たちはそんな彼を温かく、辛抱強く、愛情を持って接してきた。今では泣くことも激減し、学習面では遅れを感じながらも、大人と対等に話す彼を見ていると、一体なにが彼の中に起きているのだろうと考えさせられる。おそらくとても長い間、生きづらい思いを経験してきたと思う。この先、彼が一般の仕事に就いた時、周りの人間は最初、障がいに気付かないであろう。だがしばらくすると分かるであろう。ちょっとしたメモや暗算をした時、

「ああ、そうか」と。いまだに障がいや特性を遠巻きに引いて見る人間はとても多いと感じる。障がい者はマイノリティであり、少数派というのは大きな社会では畏怖の対象となるからだ。障がい者の特性とそれによる生きづらさを理解し、それを理解しないもしくは受容できない定型発達の人々にも配慮するのが私たち特別支援学級の担任団の仕事だと思う。私たちはいわば二つの世界を行き来することが出来る「ミディアム＝間に立つ者」である。話を担当の男子生徒に戻すが、つい先日もクラスメイトとトラブルを起こし、初めて彼を個別指導した。「最近なにかあった？」と静かに声を掛けると家庭での不満、進路への不安、友達への思いなどを一気に話してくれた。彼の背負っている過酷な運命が重かった。やっとなこと「あなたが希望の高校へ行くために一緒に頑張ろう！だから暴力と暴言はだめだよ」と伝えた。小さくうなづいた彼は翌日また後輩男子と言い争ったが、私が目を見て「約束は？」と言うとブツブツ言いながらその場を去った。その背中を見ながら心の中で「やっぱりやっかいだ、でも楽しい」とつぶやいた。

10月 月間カンファレンスをふりかえって

ミドルリーダー養成コース2年/高浜町立高浜小学校 今井 悠介

教職大学院での学びも残すところ数か月になり、いよいよ長期実践報告として実践をまとめていかなければならない時期になった。この2年間、実践と省察をくり返しながら探究を進め、その都度記録して足跡を残してきたつもりではあったが、それらをつなげまとめていくことは、なかなか難しい。しかし、学校における探究活動の実践および私自身の探究の総仕上げとして、最後まで頑張らねばという思いで日々過ごしている。

この2年間の月間カンファレンスに参加することで、毎回新たな気付きや視点を得て、学びを深めることができていると実感している。今回は、10月の月間カンファレンスの振り返りとして私自身の学びをまとめたいと思う。

今回のテーマは、「新たな同僚を支え、世代を超えて学び合う」である。まず、県立藤島高校の鈴木先生の報告を聞いた。藤島高校において、教員による学びの自主組織「すずかけAGORA」を立ち上げ、年齢や経験年数を問わず、主体的に語り合い学び合う組織を形成されていることに深く感銘を受けた。「すずかけ＝プラタナス」「AGORA＝広場」というネーミングは、高尚さを感じつつも温かい印象を受け、私の頭の中に残った。中身(取り組みや実践)が大切なことはもちろんであるが、ネーミングの重要性も感じた。すずかけAGORAは、集合型で、またはインターネット(グーグルクラスルーム)を活用して活動されているそうである。毎回テーマを設定し、興味関心のある教員が集う。そこでは生徒の未来を語るこ

とで、教師自身の人間観や教育観を磨いていく。得た学びはデータとして記録し、全教職員で共有できるシステムとなっている。語り合える安全性が保たれ、藤島高校の教員組織の潤滑油的な存在として位置づいているとのことである。

すずかけAGORAのような主体的な学びのコミュニティは非常に意義あるものと思う。しかし、こういった学び合う組織を新設するには、多くの労力や悩みがあったのだろうと想像する。私の勤務校では、そのような自主的な大きな組織は存在していないし、立ち上げようとしても様々な障壁があり、簡単には進まないだろうと思う。今回の報告を聞き、藤島高校にとってのコミュニティの存在意義を理解することができた。私の勤務校でもそういった組織が必要なのかを考えるきっかけになった。

その後のグループセッションでは、ここ2年間の実践のふり返しを行いながら、グループメンバーに報告した。昨年度の6年生における「コドモノアスケン(コドモノ明日研究所)」や、今年度の4年生における「アンミラ(安心安全 未来プロジェクト)」の活動実践を語り、グループメンバーから意見をいただいた。その中で、自分では気づくことのできなかった新たな視点を得ることができた。高浜小学校では、地域団体「高濱明日研究所(アスケン)」との協働で探究活動を進めている。ここ数年で、高学年が前年度の活動を継承しながら、新たな活動にもチャレンジしていくという流れができていく。地域団体のアスケンと学校が協働しながら、全体では1つのコミュニティとして成り立っている。すでに強力なコミュニティの中に私たちがいるということである。

また、本校では、校内教員の一人一人が実践報告を書いて語り合う校内カンファレンスを年に2回実施している。この場には、校内教員の他に、教職大学院のスタッフの方々や、高浜小学校に入学してくるほとんどの子どもが通っている、公立認定こども園「c o c k a r a」の先生方にも参加していただき、小グループに分かれて語り合っていた。このように、1人の実践を校外の方も含めて多くの人が語り合うコミュニティが存在していることも、今回のカンファレンスの中で捉え直しをすることができた。

藤島高校のすずかけAGORAの取り組みを聞いているときには、何か新しい組織や取り組みを創っていくことが自分に求められていると勝手に思っており、それが叶っていない自分自身へのふがいなさや力不足感みたいものを何となく感じていたように思う。しかし、その後のグループセッションにおいて、組織を立ち上げることが重要なのではなく、そもそも存在の必要性があるか、探究が継続できる組織なのかをよく考えることの重要性を感じた。そして、改めて捉え直してみると、私の学校にはすでに実践コミュニティが存在しており、その中には自分自身がいるということを認識することができた。それは、今回のカンファレンスのテーマである「新たな同僚を支え、世代を超えて学び合う」ことにも直結している。すべての同僚がこのコミュニティに属しているからである。だから、私自身の場合、新たなコミュニティを創ることが必要なのではなく、まずは今あるコミュニティを見つめ直し発展させていくことが大切なのだという事に気づいた。それが、今回のカンファレンスでの学びである。

「対話」を通して協働で学ぶ

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/福井市清水中学校 川崎 多花子

昨年度の1年履修事前講習を含めると教職大学院で学び始めて1年半が経った。毎回メンバーを変えてのカンファレンスで、自分の知らない世界を知っ

たり、自分を見つめ直したりと、いろいろな刺激を受けている。

10月に行われた合同カンファレンスでは、若手教員の育成や協働で学ぶ実践を聞くことができた。自由参加であり、開催時間を30分に設定した若手の会「クレリア会」を発足し、参加する若手教員の聞きたいこと、知りたいことをテーマにすることで、この会を身近なものとして感じてもらうよう工夫したことなど、具体的な内容であった。教員が協働で授業研究し、学び合っていく実践であり、興味を惹かれた。特に印象に残ったのは、実践前後の教員の変容である。この会に参加し、協働で授業研究をしたことがきっかけで、他の教員に相談するようになったり、他校へも学びに行くようになったりと、協働的な学びに積極的に取り組むように変容したことが素晴らしいと思った。

続いて、各自の実践を話し合った。午前のグループでは、ミャンマーから教職員大学へ学びに来ている教員から日本の教育の素晴らしいところを自国でも取り入れたいという話を聞いた。日本の教育の素晴らしさを実感するとともに、ミャンマーで行われている教育の素晴らしさも知ることができた。ミャンマーでは、小学校から高校までの教員で会議をするなど、今の私たちが目指している異校種連携が活発に行われている。また、子どもたちは教員がついていなくても、全員が静かに自習できるなど、学習に対する意欲がとても高い。本校でも異校種連携を積極的に進め、子ども達への理解を深めていきたいと感じた。

私は、研究主任の立場であり、協働で学ぶ研究会を目指していることを話した。本校の研究主題である「自律し協働しながら高め合う生徒の育成」を目指し、今年度から生徒の姿を軸にして小グループでの話し合いを続けている。授業では、教員がファシリテーターとして生徒の思いをつないでいくことが求められている。授業でも研究会でも、協働で学び合うために、教職員大学で知ったファシリテーターを校内の研究会でも導入している。本校ではファシリテーターの経験が少なく、ファシリテーターという言葉も

浸透していなかった。そこで、1学期の前期指導主事訪問では、教職大学院から4人の先生を招いて、研究会でファシリテーターの役割をしていただいた。実際に話し合いで意見をどんどん繋いでいく姿を目の当たりにして、ファシリテーターの役割や重要性をどの教員も実感したようであった。カンファレンスでは、これからどのように進めていくと、より積極的に協働で学べるのかを考えていることを話した。話し合う中で、小グループになると自然に年長者がファシリテーター役になっていることを実感した。そこで次回からは、若い教員も含めた教職員全員にファシリテーターをしてもらう工夫をしようと考えた。また、校内研究会の後に全員が意見を書いて共有している学校があることを知った。本校では話し合いの後グループごとに発表していたが、全員に感想を書いてもらうことを取り入れたい。そして、研究授業の指導案検討会で、他教科の指導案に対して意見を言いにくく、研究が深まらないことも相談した。教科の専門的な話題を中心に持ってくるのではなく、生徒の姿を中心に話し合うと研究が深まるというアドバイスをもらった。例えば、「目的は何か。」「どんな子どもを目指しているか」など、子どもを中心に考えるというのが本校の取組にも合っており実践していきたい。

午後からのグループで、私のほかにファシリテーターのことを話題にした方がいた。ファシリテーターを難しいと考えている教員が多く、グループによって、話し合いの盛り上がりには差があること、ファシリテーター役をした多くの教員が、これでいいのか不安に思っていることが悩みであると聞いた。私と同じようなテーマであったが、午前と異なるメンバーとカンファレンスで話し合う中で、改善点として、課題を事前設定、質問の視点の提示、共感したところの発表などがでた。

教職大学院でメンバーを変えながら、それぞれの実践や悩みを話し、一緒に考えることで自分の世界が広がっていき、考えがまとまることを実感した。

楽しさと辛さ

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/福井県教育総合研究所 巻下 健太郎

教職大学院に入学して半年が経ち、カンファレンスに参加してもらって顔見知りが増えてきた。グループ協議では新しい出会いがあり、自分に備わっていなかった視点を得ることも楽しみの一つだが、お久しぶりですという人のその後の話を聞くのも楽しみの一つである。あのとき悩んでいたけどその後どうなったのか、実践の途中だったものがどういう結末を迎えたのか、聴きたい、話したいことは山ほどある。多くの人とは一期一会であるが、縁あってか再びおなじテーブルを囲むことになった人たちのその後について書いていきたい。

毎月のカンファレンスでは様々な立場、境遇にある人たちの話を聴き、考えを深め、ものの見方の幅を広げている。その中でも今回はコミュニティの運営の難しさ、人間関係の機微の複雑さについて多くのことを考えさせられた。

コミュニティを運営するにあたっての自分の立場、人間関係の機微、集団としての発展性など様々な点に悩み、試行錯誤の渦中にある話を聞いて感じたのは楽しそうだなという思いである。本人は苦悩の真っ只中にあり、しかも、この話は以前に聞いた話の後である。つまり、相当に長い期間、もがいている実践の記録なのである。しかも、時間的な終わりが見えてきたのに、内容的な終わりが見えないという本人にとっては如何ともしがたい状況なのであり、一言で言うと「辛い」とのことである。

当事者としては確かに「辛い」ことは確かだと思うが、そういう時期を乗り越えてしまった身としてはうらやましいと感じる。仕事をしていく上では、意見や方針の相違による小競り合いや、自分の想いを飲み込んでの業務遂行などは日常茶飯事である。その一つ一つに拘ってはい何も始まらない。この拘れないという点に自分は辛さを感じることが多い。一方、先の彼はあっちにぶつかり、こっちにぶつかりで前に進めないという状況に辛さを感じている。この差はどこからくるのだろう。

立ち止まって考える時間が十分にあると辛い、立ち止まって考える暇も無く時が流れていくのが辛い。この差を自分になりここう考えてみた。どちらにも共通するのが「考える」である。しかし、これをもって人間の営みは探究的だなどと片付けてしまうのはつまらない。何事かについて必死に考えている人間は辛さを伴っている。それは端から見ている人間はそこから楽しさを感じ取る。では、自分を客観視すれば辛さの中に楽しさを見出すことができるのか。おそらく答えは否である。辛いほど考えているということは客観視するなどという選択肢はないのである。ひたすらに現実と向き合い、自分と向き合い、他人と向き合い、その後を考える。その繰り返しの中で時々小さな光に喜び、新しく見つけた穴の深さにおののき、それでも降りていかずにはいられない。

今、自分は他人事としてこの文章を書いている。文章にしてみると、この考えるという終わりのない道行きがとても楽しいもののように思える。この文章を読まれている皆さんにもその思いは共有してもらえるのではないだろうか。人の不幸は蜜の味などということではない。何事かに向かって考え、行動する人の姿を見るのは自分を勇気づけることになり、自分もまた新たな道行きに戻ろうという気持ちになるという点で楽しいのである。自分はこのように考えている。

当然、自分には自分の道行きがあり、当事者としては辛いことこの上ないのであるが、その姿が端から見た人が楽しそうだと感じられるほどのものなのかは問い直す必要がある。

話を現実に戻すと、ついに長期実践報告の作成についての話が出た。まさに、自分も深い穴をのぞき込んでいる状況に立たされている。辛そうだなと思いつつも、降りずにはいられない誘惑に駆られている。

当事者としての辛さ、傍観者としての楽しさこの二つを擦り合わせる機会としても、これからのカンファレンスが楽しみである。自分の辛さを楽しんで

もらい、他者の辛さを楽しむ、そして、何かにたどり着いたとき苦しさが楽しさに変わることを信じている。

同僚との対話が、私に気づきをくれる

学校改革マネジメントコース2年/勝山市立三室小学校 酒井 範子

早いもので、10月。暑い！熱い！夏季集中講座を経て、秋の到来です。勝山の秋は、短いといわれています。秋に入ったかなと思うと、すぐに雪が降るので、豪雪地域にぴったりの言葉です。それにしても、今年は、くま・クマ・熊です。ほぼ毎日、緊急メールには、熊の出没情報が入ってきます。我が家の近くにも、大きな熊の糞がありました。家の敷地内に駐車場がありますが、その短い距離でさえ危ないと家族が言うので、駐車したら猛ダッシュ！！で玄関に駆け込みます。勝山の秋を毎日、足でも感じています。

さて、10月のカンファレンスでは、グループの先生方と語り、耳を傾けることで、自分事として考えることができました。そして、今、私のチャレンジしたいことが見えてきたように感じています。

午前中は、「新たな同僚を支え、世代を超えて学ぶ合うことの意味」をテーマに、宮谷郁江先生（岐阜市立徹明さくら小学校）の実践発表がありました。徹明さくら小学校が抱える悩みについて、宮谷先生は、

- ・20代と50代の先生方で構成されることによる年齢の二極化
- ・授業向上のために学ぶ教員の意識の希薄化
- ・新しいことへの拒否反応

を挙げられました。さらに、宮谷先生は、「このような状態を把握していたのにも関わらず、コロナを言い訳にして、何もしてこなかった」とお話されました。しかし、2年間という短い期間で、見事に学校を実践コミュニティへと向上させていきます。お話を伺い、宮谷先生の機動力と学校の課題に向き合う真摯な姿に感銘しました。その一方、この素晴らしい力は、大

学院の学びが支えているからなのではないか？とも感じました。なぜなら、私自身が、そうだからです。大学院での学びが今の私を立ち止まらせてくれたり、省察する機会を与えてくれたりします。ただ、残念なことに、私は宮谷先生のように、自分のやるべきことを明確にし、行動できていません。それでも、前述のとおり、チャレンジしたいことはあるのです。

グループセッションでは、校種を超えた先生方との対話が、有意義な時間でした。私の勤める学校では、今、子どもたちの主体的な学びについて、語る・考える時間が増えています。昨年度までは、本校の文化として受け継がれてきた前年踏襲や教師が与え続ける学習形態が主流だったのに、最近は、先生方が協働し、変えていこうとしているようにさえ感じます。これは、研究主任を中心に、本校の小さなコミュニティを生かし、対話を続けながら、学びあう価値を見出してきた結果だと確信しています。それでも、どうやったら、子どもたちの探求心を呼び起こせるのか、「〇〇を調べたいから時間をください！」と言ってもらえるのか、子どもに気づきをもたせる問い方が、分らずにいます。

今、私にはチャレンジしたいことがあります。それは、地域財産を発信していく「探求」の取り組みです。私の中には、構想？妄想かもしれませんが、こんなことやりたいなあ企画案は次々に浮かんでいます。また、「発信」や「探求」に必要な力についても、本校の子どもたちを思いながら考えています。でも、それはあくまで私の意見。実際、子どもたちは、自分たちが住んでいる地域のどの部分を発信したいと思っているのか、分かりません。だから、近いうちに、教

員と子どもたちで対話の時間をもとうと考えています。大人の持っているベンチに、子どもたちをお迎えして、子どもたちの思いを聞きたいと考えています。そのために、今年度は、全校で総合や生活に取り組みのように時間割を組みました。子どもたちの豊かな

アイデアや発想が、今から楽しみです。教師対教師や、教師対子どもたち、そして、子どもたち対子どもたちに、どんなやり取りが生まれ、探求に向かっていくのか、様々なコミュニティに生じた学びのストーリーをお伝えできるように励みたいと思います。

教職大学院での学びが広がる喜び

学校改革マネジメントコース2年/岐阜市立草潤中学校 中今 純一

10月のカンファレンスを終えて、福井大学教職大学院で学ぶ時間が、いよいよ残り半年を切りました。長期実践研究報告の執筆に向けての説明もあり、「そろそろ取り掛からないといけない…」と焦りが出てきました。それと同時に、福井をはじめ全国の先生方と一緒に学ぶ時間があとわずかだと思うと、寂しくもなりました。

10月のカンファレンスは「新たな同僚を支え、世代を超えて学び合う」をテーマにして、さまざまな先生方のご実践を聞きました。その中でも、越前市立吉野小学校の武藤先生は教務主任として、校内研究や研修を進めるうえで、職員間の意識の差を埋めるために日々、試行錯誤をされていました。私自身も同じ教務主任として、多様な職員がそろそろ集団をどのようにして成長させていけばいいのか、試行錯誤を繰り返しているところであったので、武藤先生のお話を聞いて共感する点が数多くありました。そのお話の中で、「職員の意識の差を埋める」とは、具体的にどういったことなのか？といったことが話題になりました。校内研修を例にとっても、やる気度の違いがあったり、そもそも研修の必要性を感じていない人もいたり、職員の意識がバラバラの状態のなか、「差を埋める」とはどういうことなのか…。均一化することなのか、画一化することなのか、そもそも差を埋める必要があるのか。職員間で意識の差があるのは当たり前であって、差を埋めることに何の意味があるのか。先生によってやる気度は違っても、どの先生も校内研修の目的と必要性を理解し、同じ方向にベクトルが向くことが大切ではないかと思いました。

そのための働きかけや仕掛けを考えていきたいと思っています。

昨年度の4月、福井大学教職大学院に入学した当初は、対話を中心とした学びのスタイルに疑問を感じていました。「対話をするに何の意味があるのか」とも思っていました。それが今では、対話を軸にした学びのよさを実感し、校内の職員研修にもラウンドテーブルを位置づけ、定期的に職員と対話を重ねています。それにより、職員の同僚性が高まり、子どもたちへの支援にも大きく繋がっています。そして先日、学校行事の「みんなでラウンドテーブル」を開催しました。これは「草潤中学校の今と未来について考えよう！」というテーマについて、生徒・保護者・職員が一緒になって対話をしました。本校の生徒は全員、不登校を経験していることもあるため、さまざまな配慮をしたうえで実施しましたが、ラウンドテーブル終了後のアンケートには、「いろいろな人たちの話が聞けて楽しかった」「最初は緊張したけれど、話すことができてうれしかった」「草潤中学校のことを生徒・保護者・先生たちみんなで話し合えたことがうれしくもあり、一緒に学校を創っていけると思うとワクワクします」といった意見が書かれていました。今回、とても好評だったので、来年度以降も実施していきたいと考えています。

福井大学教職大学院での学びが、私自身だけにとどまらず、生徒や保護者、職員、そして学校全体にまで広がっていくことにうれしく思うと同時に、教職大学院で出会ったみなさんへの感謝の気持ちがあふ

れてきました。福井大学教職大学院で学ぶ、残された時間。改めて大切にしていきたいと思いました。

経験をもとに学び合う

学校改革マネジメントコース2年/福井県教育総合研究所 三上 勝

夏期集中講座を終え、慌ただしい9月を過ぎ、少し落ち着いてきた10月。今月の月間カンファレンスでは、夏期集中講座以降の実践をもとに充実した対話を行うことができた。

「新たな同僚を支え、世代を超えて学び合う」のテーマのもと、私は午前のセッションで若手教員研修のクロスセッションにおける実践を発表した。

この研修は、初任者・2年目・3年目の先生方が今年度のこれまでの授業実践研究の記録をもとに小グループで語り合い、傾聴する。小グループは同じ校種・同じ教科の先生で編成し、その中に初任者・2年目・3年目の先生が1名以上入るように考慮したものになっている。私はファシリテーターを務め、話し手には実践記録をもとに自分の言葉で実践を発表すること、聞き手には自分の実践を思い出しながら傾聴し、学んだことや聞きたいことを話し手に返すことを確認してクロスセッションを進めていった。

毎年このクロスセッションでは、3年目の先生が活躍する。後輩にあたる初任者・2年目の先生に対してこれまでの自分の経験をもとに授業実践についてのアドバイスをする。そのアドバイスも児童・生徒の学びを踏まえた的確なものが多い。3年目の先生が先輩として後輩を支える姿を見ることができ、ファシリテーターであった私はとても頼もしく感じた。

受講した先生の振り返りを見ると、「同じ初任者の実践だけでなく、先輩方の実践内容を聞くことができてよかった」（初任者）、「初任の先生の話の聞いたり、ファシリテーターの先生のお話を聞いたりしたことで、今一度自分の実践を振り返ることができた」（2年目）などがあり、この研修において教職経

験をもとに世代を超えた学び合いが行われていたと実感した。

今日、若手教員をどのように育成していくかが課題となっている。この課題を解決するためには世代を超えた学び合いが大切である。今回のカンファレンスでの岐阜市立徹明さくら小学校の宮谷先生の実践発表をお聞きし、私はとても感銘を受けた。若手教員を育成するためには校内研修を改革することが必要である。宮谷先生の実践からベテラン教員の力を最大限活かし、若手教員の育成するための実践コミュニティづくりを学ぶことができた。若手教員を育成するためにベテラン教員の経験は大きな武器になる。ベテラン教員をコミュニティに巻き込み世代を超えて学び合うことで若手教員はたくさんの学びを得ることができる。また、ベテラン教員にとっても若手教員からよい刺激を受けることができる。このような実践コミュニティを創ることが校内研修の目指すべき姿である。今後の私の実践にも活かしていきたい。

午後のセッションでは、それぞれの学校組織の現状とその課題について、実践コミュニティの視点から対話をした。その中で2人の先生から県のマネジメント研修の受講が大きな転換になったことをお聞きした。私は現在、このマネジメント研修を担当している。担当している者とすればとてもありがたい言葉である。マネジメント研修は経験をもとに学び合う研修である。今後も教職大学院で学んだことをもとに学び合う研修を企画し、運営していきたい。

今月の月間カンファレンスを受講し、「新たな同僚を支え、世代を超えて学び合う」ことの大切さを改めて知った。今後もしっかりと学び合えることができるように、さまざまな経験を積んでいきたい。



事務連絡

入試説明会のお知らせ

福井大学連合教職大学院 入試説明会

令和5年

※オンライン（Zoom利用）により開催します。

12/17 日 13:00-

13:00からの全体説明のあと、
概ね14:00から個別相談となります。

教職開発専攻

授業研究・教職専門性開発コース
ミドルリーダー養成コース
学校改革マネジメントコース

学生募集日程（一般選抜）

令和6年度 第1回入試

出願期間：令和6年 1月15日(月)～ 19日(金)
試験日：令和6年 2月 3日(土)
合格発表：令和6年 2月14日(水)

令和6年度 第2回入試

出願期間：令和6年 2月15日(木)～ 21日(水)
試験日：令和6年 3月 2日(土)
合格発表：令和6年 3月14日(木)



過去問を
入手できま
す。

募集要項を
入手できま
す！

出願を考えている方、関心のある方は、
お気軽にご参加ください。

※参加希望の方は、以下のURL又はQRコードから
申し込んでください。
<https://www.ocans.jp/u-fukui?fid=FCLWXat7>

申込受付期間
令和5年10月2日(月)～12月8日(金)



教員免許取得プログラム

（推薦選抜を除く）

授業研究・教職専門性開発コースの入学で、教職に対して強い意欲を持った者に、小学校、中学校、高等学校（取得出来ない免許もあります。）又は特別支援学校の教育免許取得の道を拓くものです。

授業料は、通常の2年分の授業料を3年間で分割納入することになります。

福井大学学務部入試課

電話：0776-27-9927

E-mail：g-nyusi@ad.u-fukui.ac.jp

格致によりて 人と社会の未来を拓く
国立大学法人
 福井大学
UNIVERSITY OF FUKUI

福井大学大学院・連合教職大学院 〒910-8507福井県福井市文京3-9-1 TEL.0776-23-0500（代表）

Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。
修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。
関心がある方は、dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp までご連絡ください。

Schedule

11/18 Sat.	月間カンファレンス A 日程、	11/25 Sat.	同 B 日程 / 東京ラウンドテーブル
12/23-25	冬期集中 a 日程、	1/5-7	同 b 日程
1/31	長期実践研究報告締め切り		
2/4 Sun.	長期実践研究報告会		
2/17,18	実践研究 福井ラウンドテーブル 2024 Spring Sessions		
3/14	運営協議会		

【編集後記】

ようやく秋めいてきたと思ったら、もう冬間近といった時季になりました。176号では、院生さんのインターンシップ先での授業実践の記録が数多く掲載されています。その記録には、授業づくりに試行錯誤を繰り返しながら、悪戦苦闘している姿が描かれています。しかしながら、そこには教職大学院での学びを確実に活かしながら、理論と実践の往還に挑戦する姿があります。また、そんなストレートマスターの院生さんからの報告に刺激を受け、これまでの自分の実践の意味や価値を省察し、新たな教師の学びを展望しようとするミドルや学校改革マネジメントコースの院生さんの報告もありました。10月のカンファレンスのテーマであった「新たな同僚を支え、世代を超えて学び合う」を実感する編集となりました。(I.O)



教職大学院 Newsletter **No.176**

2023.12.26 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院 福井大学・
奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
連合教職開発研究科
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp